信毎歌壇

米川千嘉子選

好い人とお人好しとは違うよと身に沁みるなり冬の雨音　（上田市）小林さよ子

山歩きに男の子はすぐ棒を持つ石器時代のDNAか　（泰阜村）松島　房子

短大も会社も家から通う娘をまんが娘に育ててしまった　（千曲市）関　津和子

バス揺れて漢字あふれる首都北京なに売る店か当てながら行く　（松本市）興　絹枝

美しき入れ歯の母に言われたり「どうして林檎を細かく切るの」　（長野市）原田りえ子

「さりげなく大事なことはやってくる」と思いつつ生きる平穏な日々　（千曲市）荒井よし子

軽々と動く手足の夢にさめ切なさもどる夜半のまぼろし　（長野市）丸山　祐司

一時間前に火鉢に炭熾すかつての役員真剣だった　（小布施町）市村　憲彦

ニニロッソの「夜空のトランペット」聞きながら夜勤に出でゆきし我の若かり　（駒ケ根市）塩沢　春子

妖精の火と呼ばれたる木瓜の花師走の生け垣に紅色はなつ　（長野市）黒柳　響子

佳作

孫たちの遊び場となりし押し入れに貼られしままの雪だるまのシール　（大町市）小西　美恵

朝な朝な南アルプスじっと見て緑内障を一喜一憂　（箕輪町）向山　政俊

選評　第一首、「好い人」のつもりがいつの間にか「お人好し」の役割になっていたと知る。人間関係の苦さをかみしめたのだ。第二首、今どきの男の子もこんなことをするのだとしたら、何かほっとするところも。第三首、ずっとわが家にいたのだから、人の責任にはできない。でも、現代の漫画の表現力、内容の複雑さや深さは小説にも負けないものがありますよ。第四首、場面が浮かぶ等身大の旅の楽しさ。

小池　光選

三世代生き物だらけの大所帯犬猫家鴨に鶏百羽　（木曽町）新村　亮三

瓶詰めの梅ジャム香る冬の午後母亡くなりて七年経つも　（松本市）川久保恵子

離れ住みの子らに手づくり干し柿をりんごのすき間にしのばせ送る　（長野市）島田　怜子

焼芋を特養の庭で焼く日きて歳取るたびに一年早し　（千曲市）関　津和子

空に風地下にはお湯の流れゆく音聞くことは鹿教湯温泉　（東御市）広沢里枝子

珈琲を私と母の二人分用意していた一年前は　（長野市）宮崎　雄

あかときの夢に目覚めて疲れをりカーテン引けば雪の屋根屋根　（小海町）依田　久代

病むひとの悲喜抱きとめて風に立つ医療センターはころの救世主　（佐久市）篠原　敬子

バー「ルパン」に片ひざ立てて酒を飲む太宰治に憧れし頃　（飯山市）小野沢竹次

命あるかぎり生きて行かねばと雀ひたすら食にいそしむ　（長野市）小日向栄子

佳作

「リボンの騎士」を夢中で読みにき故郷の丸文書店の閉店を聞く　（駒ケ根市）塩沢　春子

おじいちゃんチューしてあげると曾孫より耳許かすか受話器に音する　（上田市）勝見　稔

選評　第一首、老いの１人暮らしがつらい世の中にあってなんとしあわせな生活だろう。三世代に加えて犬おり猫おりアヒルおり。ニワトリはなんと百羽もいる。実にめでたい。お正月にふさわしい歌。第二首、上句から下句への転換がいい。きょうはあたたか、梅のジャムが香る。ふと亡き母を思い出すのだ。第三首、干し柿をりんごのすき間につめるというところがいい。子を思う気持ちがよく出ている。

小島　なお選

祈ることは蝶の羽ばたきいつの日か戦で誰も死なない世界　（東御市）吉沢　好樹

蝶戯れたると思へば木の葉にてこの日を夢見たりしや木の葉　（安曇野市）東野　行岳

ガラス戸に影絵となりてうつりゐる我が手は母の骨格に似る　（長野市）北沢　京子

掃き集めるこれが紙幣であったならこんな思いで今年も暮れる　（安曇野市）加藤　文人

林檎の礼言う福島弁温かし揺れるたび逃げ込む場所を探すと　（佐久市）篠原　敬子

ネパールの若者二人食堂の接待係「茶わんむしどうぞ」　（長野市）島田　怜子

みづからの果実の重さに枝を折る遺伝子のみを残して来たり　（長野市）原田　浩生

蝶呼びて、蝉、蜻蛉、冬鳥寄せて激渋なれど父の柿の木　（東御市）渡辺美保子

猛暑日に偲ぶ元伊那飛行場渇きに耐えて押したトロッコ　（飯田市）林　堤和

雪止まず雪国鬱になるものか赤きワンピで柚子味噌を練る　（飯山市）市村紀久子

佳作

よるべなき山河虚空の空の下見る物尽きて山も眠るか　（佐久市）三石　俊司

面会の琥珀のぶどうのブローチに認知症の母は手をきしのべぬ　（長野市）宮崎　久子

選評　第一首、２枚の手のひらを合わせる祈りの形。羽ばたく蝶となって、平和の願いが戦禍の国々に届きますように。第二首、木から離れて地に落ちるまで。ほんのひとときの自由を、葉は季節をかけてじっと夢見ている。第三首、影絵の手は懐かしくやさしい記憶を呼び起こしただろう。ふかぶかとした陰影。第四首、掃いても掃いてもなくならない落ち葉にため息交じりの妄想。歳末らしい夢。